127 トッパンホールプレス
［Jan. 2024］隔月発行

TOPPAN HALL PRESS

イリア・グリンゴルツ（2003.10.1）© 大窪道治

イリア・グリンゴルツ（ヴァイオリン）――無伴奏
驚異のプログラムに映る自然体の姿　　渡辺和彦

Trio Rizzle［トリオ・リズル］meets グリンゴルツ
毛利文香（ヴァイオリン）、田原綾子（ヴィオラ）、笹沼 樹（チェロ）
“深化”と“邂逅”――アンサンブルの変革を楽しむ　　戸部 亮

［特別寄稿］
アレクサンドル・メルニコフ（ピアノ）
閃きとセンスで浮かび上げる、師リヒテルの美学

Artist Interview
岡本侑也（チェロ）――無伴奏Ⅱ
真新しいプログラムで臨む、渾身の無伴奏

［ Schedule 2024.1～6 ］
［ Information ］
第15回 TOPPANチャリティーコンサート
ランチタイムコンサート Vol.126 中 恵菜（ヴィオラ）／キラリふじみ・コンサートシリーズ ニューイヤーコンサート 2024

「異次元の無伴奏――グリンゴルツ」「究極の室内楽――Trio Rizzle＆グリンゴルツ」
凄腕ヴァイオリニストの真価に、トッパンホールから誕生した弦楽トリオ・Trio Rizzleの魅力、公演の聴きどころについて、それぞれご紹介いただきました。

驚異のプログラムに映る自然体の姿

渡辺和彦

あのイリア・グリンゴルツが帰って来る。しかも今回は「無伴奏」。とは言ってもいつもの彼のハードな、または捻ったプロとは様相が異なり、敢えて言えばシンプルで“優しい”プロ。えっ、シャリーノのあの《6つのカプリース》が今回も入っていて、同じ作曲家の《6つの新しいカプリース》（2023）日本初演も予定されている。ヴィトマンもある。あの難しいエルンスト作品も3つ、あとはイザイが2曲。難曲揃いではないか。

それでいて“優しい”と感じるのは、これらの曲目が以前のグリンゴルツのような、「現在のヴァイオリン界を牽引する私を聴いてほしい」という強い意欲から来るものというより、いまの自然な自分を知らせたいという姿勢のほうを強く感じさせるからだ。「あ、今回はこれです。聴いてくださいね」。グリンゴルツならば曲は何でもいい。

思えば長い道のりだった。個人的なことで申し訳ないが、「ロシアにいまイリア・グリンゴルツというとても優秀な少年がいる。ペテルブルク派のリベロヴァの生徒だが、元々はノボシビルスクのブロンの生徒でレーピンにかわいがられている。ユダヤ系なのでロシアを離れるかもしれない」云々の情報が立て続けに入ってきて、BISレーベルCDの解説を書いたのが2000年ころ。やがてその通りになり、彼はザハール・ブロン（ノボシビルスクでレーピン、ヴェンゲーロフを育てた）の門下生から、いつの間にかロシアを離れて「パールマンの秘蔵っ子」に変身していた。それまではレーピンやヴェンゲーロフのアンサンブルやデュオで第2ヴァイオリンを担当。ヴェンゲーロフのリサイタル・チラシ下に小さく顔写真があるので出かけると、実際には両名交互のヴァイオリン／ピアノによる演奏会だったこともあった（2016年12月5日サントリーホール）。

言い方は悪いが長いあいだ彼は引き立て役だった。しかしいま、ロシア国内に封印状態で夫人のバレリーナの座付きヴァイオリニストのようになっている兄弟子レーピンと、現在のグリンゴルツでは立場は逆転。政治状況の事を言っているのではない。その演奏と音楽の在り方、ヴァイオリン界でのポジションの話をしている。

2017年9月19日、グリンゴルツはパガニーニの《カプリース》の間にシャリーノの6曲のカプリースを挿入して全30曲を一晩で演奏するという「暴挙」をやってのけた。終演後、「木に竹を接ぐようで全く噛み合わなかった」との感想を漏らしていた現代音楽の研究家がいたが私の感想は真逆。あの演奏会はパガニーニがどれほど未来志向の作曲家であったかを見事に立証してみせた。「木に竹」どころか、6曲と24曲はごく自然に融け合い、リサイタルは本当にスリリングだった。

「トッパンのグリンゴルツ」では2018年11月13日、ピアノのペーター・ラウルとのデュオが忘れられない。あれも見事だった。いきなりショスタコーヴィチのソナタで始め、休憩後はストラヴィンスキー大会。《火の鳥》《悲歌》《ナイチンゲール（ウグイスの歌）》《バラード》《ディヴェルティメント》。ショスタコーヴィチは重音など全く混濁せず、ひとつひとつの音が驚くほど正確で音は透明。音の格闘技のようなスケルツォ楽章も含めて、曲の印象を覆してしまった。あのソナタ、大汗垂らして時代や作曲家と格闘するドロドロした音楽でなかったかもしれない、そう思わせる忘れがたい演奏だった。後半はある意味リラックスタイム。あのような芸当は歴戦の勇者でないと出来ない。あの時の彼はもう、そのような存在になっていた。

現代の名手と言われる人でテクニックの弱い人はいない。それにしてもグリンゴルツは凄い。凄さを感じさせないところがまた凄い。それでいて冷たい感じを与えず、むしろその正反対。演奏の背景に生まれ育ちや民俗的な「血」を持ち出して語るのは大嫌いだが、彼の場合はそれを持ち出したくなる誘惑にかられる。ボウイングはロシアの、近年あまり名手を生み出さなくなったペテルブルク派のものとはかなり違う。ノボシビルスク派（ブロン自身による造語）とも異なり、パールマン直伝でもないようだ。彼は「ブロン第三の逸材」でも「パールマン最後の弟子」でもなくグリンゴルツそのものなのだ。どこがそうなのか。種明かしはリサイタルに譲る。ああ、そうなのか、と納得していただけると嬉しい。必ずそうなると信じている。「グリンゴルツは名手らしいけど選曲が凝り過ぎて近づきにくい」と感じているヴァイオリン好きがいるなら、損をしているかもしれない。今回のプログラム、実は自然体で優しいですよ。

（わたなべ・かずひこ／音楽評論家）

イリア・グリンゴルツ（ヴァイオリン）**―無伴奏**
2024年2月13日（火）19：00
イザイ：無伴奏ヴァイオリン・ソナタ第1番 ト短調 Op.27-1
シャリーノ：6つのカプリース（1976）
エルンスト：練習曲第1番／第4番
イザイ：無伴奏ヴァイオリン・ソナタ第5番 ト長調 Op.27-5
シャリーノ：6つの新しいカプリース（2023／日本初演）
ヴィトマン：ヴァイオリン独奏のためのエチュード第3番（2002）
エルンスト：練習曲第6番《夏のなごりのばら（庭の千草）》
5,500円／U-25 2,500円　全席指定
特別協賛：株式会社 竹中工務店

“深化”と“邂逅”――アンサ

コロナの影響は日本の音楽シーンに変革をもたらした。その一つは聴き手の指向である。我々はとかく海外からのアーティストを礼賛的に受け入れて、日本出身のアーティストはそれよりも一つ劣後させた見方をしていなかっただろうか。そこに突然やってきた移動制限。音楽を愛する人たちは、目の前のアーティストに目を向けるようにならざるを得なくなった。必然的か、仕向けられてか、いずれにせよ外部環境が我々に変化をもたらした。

しかし変化は思わぬ結果をもたらした。それまで日本のアーティストを積極的に選好して聴いてこなかった人たちが――むしろ欧米礼賛していた人たちが――日本出身、日本発の演奏家を発見できたのだから。すべての世代の日本人演奏家が今や欧米と同等か、それを超える水準の演奏を聴かせてくれていると今更ながら認識できた。

聴き手の変革が起こったのだ。改革とはちょっと違う。改革は過去からの延長線上で受け継がれてきたことを改善していくイメージが言葉にある。他方、変革はこれまでの当たり前の既成概念が崩れ、一気に理想的状態に進んでいくイメージだ。先述の聴き手の認識変化は、まさに変革。しなやかに固定、既成概念を超えて、新しい聴取の価値観を生んだ。だから改革ではなく変革。日本に活動拠点をおく演奏家にそれまで以上に視線が注がれるようになり、今やそれがニューノーマルだ。

2020年8月、〈ランチタイムコンサート〉での共演をきっかけに、誕生した毛利文香、田原綾子、笹沼樹による弦楽三重奏団、「Trio Rizzleトリオ・リズル」も聴き手の指向変革期の中、生まれた。そして新しい聴取習慣の中で、支持を集めた。

支持を集めた理由は何か。コロナ禍で日本に活動拠点をおく演奏家に、我々の意識が向かっていたこと、演奏会場に行き、生の音楽を聴く渇望が基礎にあったのは間違いない。それがベースにあって、まずは弦楽三重奏であること。いい作品があるにも関わらず、顧みると実演で聴く機会が少ない状況下、聴き手の渇望に訴求したことが大きい。もう一つは、「トッパンホール・アーティスト」によるものであったからであろう。トッパンホールの舞台に立つ演奏家――特に若い世代の演奏家――は、みっちりとリハーサルを積んで本番に臨む。その痕跡が演奏にある。だから舞台にかかる演奏水準に聴き手は信頼感を持っている。トリオがトッパンホールの舞台で鍛えられ、特に成長著しい毛利、田原、笹沼によって結成された弦楽三重奏団であること、これらが支持を得た理由だろう。

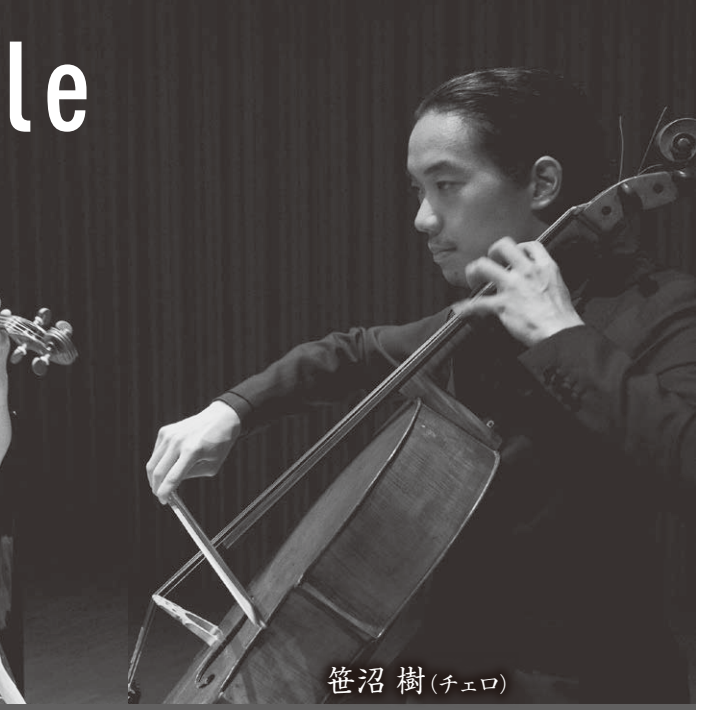
Trio Rizzle結成前夜、毛利はよく作品や音に対する思索をして、

真新しいプログラムで臨む 渾身の無伴奏

2023年は濃密な一年でした。年初にはサプライズ出演で、〈トッパンホール ニューイヤーコンサート〉で師匠のユリアン・シュテッケルさんとパガニーニを弾かせていただいて。彼も共演を喜んでくれたし、何よりとても楽しかったです！ 師匠との共演はいつでも特別なものですが、それがトッパンのステージでだなんて嬉しくて…いまでもユリアンと会うと、この時の話になります。そのほか、クリスティアン・ツィメルマンさんとのヨーロッパ・ツアーや武生国際音楽祭、エベーヌ弦楽四重奏団のツアーにも参加させていただきました。エベーヌQとはこのあと12月頭に、イギリス、ドイツ、フランスを4日間連続で巡るツアーが控えています。すべて電車移動なので、体力が持つかみんな心配しています（笑）。

＊　＊　＊

トッパンホールさんは、僕がやりたいと思うことを広い心で受け止めてくださるので、今回も妥協せず、自分にとって特別な領域である無伴奏で組んでみました。前回（2021年2月）は全体に賑やかな明るい様相の、チェロの定番と言われるような作品を並べましたが、今回は対照的に、静けさのなかで物語が展開していくような、音のない時間もキーポイントになる作品を集めています。誰とも被らないオリジナル・プログラムをつくりたいと、過去のトッパンホールのチェロ公演を調べ



笹沼 樹(チェロ)

2公演(2/13、2/16)セット券
一般・レギュラー会員9,460円／ゴールド会員8,360円

ンブルの変革を楽しむ

戸部 亮

ベートーヴェンのヴァイオリン・ソナタで堂に入った解釈を示していたし、田原は室内楽で、非常によく周りの音を聞いて、対話し、とてもうまくアンサンブルを仕上げていく姿を我々は知っていた。そして笹沼は既知のごとく、カルテット・アマービレの活動でおなじみだった。

ディープな室内楽世界に果敢に踏み込み、それぞれに十分な実績を積んでいた3人によるTrio Rizzle。2021年6月の旗揚げ公演で挑んだのは、ベートーヴェン、ヒンデミット、モーツァルトの作品だった。最初のベートーヴェン《弦楽三重奏曲》は楽聖から「まだまだ」と言われているように未成熟な出来ばえで、少々不安感を抱いた。ただその後は曲との相性がよかったのか、ヒンデミットとモーツァルト《ディヴェルティメント》は3人のさわやかな対話、清々しいアンサンブルがとてもよい印象を与えてくれた。

2022年8月の第2回公演では、ペンデレツキ、フランセ、ドホナーニの《弦楽三重奏曲》が取り上げられたが、第1回よりも情報量多く3人が楽しそうに音楽的対話をしている姿を見ながら聴いた。視覚、聴覚両面で生き生きとしたライヴ感が強化されて、筆者はとても楽しかった。もちろん楽しく聴くことが出来たのは、それぞれが高い水準にある演奏家に成長しているからだ。若いエネルギーは1年で加速度的な成長を促す。そして、彼らがニューノーマルな時代に合致した演奏家と我々が認識できる感覚が醸成されていたこと、これも公演に対する支持を高めた。

さて、今回のTrio Rizzle第3回公演。3人がそれぞれにこの1年の活動で鍛錬を積んだことと思う。楽しいおしゃべりが交わされるアンサンブルに磨きがかかっているだろう。その成果はシューベルト《弦楽三重奏曲第2番》とヴェレシュ《弦楽三重奏曲》で確認しよう。そして後半はイリア・グリンゴルツが加わったシルヴェストロフ《弦楽四重奏曲第1番》とプロコフィエフ《弦楽四重奏曲第2番》。弦楽四重奏に拡張され、Trio Rizzleのアンサンブルがどう変革されるのか。それを視覚的にも楽しむライヴだ。

（とべ・あきら／音楽評論家）

Trio Rizzle meets イリア・グリンゴルツ（ヴァイオリン）
2024年2月16日（金）19：00
シューベルト：弦楽三重奏曲第2番 変ロ長調 D581
ヴェレシュ：弦楽三重奏曲
シルヴェストロフ：弦楽四重奏曲第1番
プロコフィエフ：弦楽四重奏曲第2番 ヘ長調 Op.92《カバルダの主題による》
5,500円／U-25 2,500円　全席指定
特別協賛：株式会社 竹中工務店

スビャトスラフ・リヒテルへのオマージュ
閃きとセンスで浮かび上げる、師リヒテルの美学

アレクサンドル・メルニコフ

時に、ステレオタイプと呼ばれる固定観念の中にも、「妥当なステレオタイプ」が存在します。そのひとつと言えるのが、「ラフマニノフの音楽は、何よりもまずピアノに関係している」というもの。確かに、彼の交響曲やオーケストラ作品はいずれも傑作ですし、歌曲も素晴らしいものばかり。しかし、そうした傑作たちを耳にしたとき、わたしたちの脳は、どうしても鍵盤との繋がりを意識してしまいます。そして、それを拭い去ることは容易ではありません。ざっくばらんに申し上げて、ラフマニノフがオーケストラ作品を作曲しようというとき、わたしたちはその作品のどこかに、確かにピアノの響きを聴いてしまうのです。

そのうえで、今回最後に演奏する《ショパンの主題による変奏曲》Op.22に注目してみましょう。この作品は、どちらかといえばラフマニノフのなかでは知名度が控えめな作品ですが（もちろん、そうでなくなることを願っています）、控えめに申し上げても、演奏が難しい曲と言えるでしょう。わたしは、この曲を学び、そしてその構造を理解するすべを探しているとき、この作品がシューマンの《交響的練習曲》と数えきれないほどの類似点を持っていることに気づき、とてもとても驚きました。いくつかの類似点は、もっぱら表面的なものですが、作品の構造そのものを貫いているようなものもあって、それらは曲の本質に直接的に影響を及ぼしています。こう断言するのは少し勇気がいるのですが、これだけの数の類似点を見出せるとなると、それを「偶然」と片付けるのは、少し難しいでしょう。

両作品を繋ぐ「握手」の最も素晴らしい例は、もしかすると、長大なフィナーレの前に置かれた最後の変奏かもしれません。どちらの作品においても、最後の変奏は異質な調を用いた美しいカノンであり、シューマンの場合には主調やその平行長調で書かれて「いない」唯一の変奏、ラフマニノフの場合には、彼にとっては「愛の宣誓」を体現している調である変ニ長調から、最も遠く隔たった調で書かれた変奏です。

これ以上、わたしから類似点についてお伝えするのは慎み、あとは聴き手のみなさんがどう発見、あるいは推測されるかに委ねますが、こうした類似性によって、《ショパンの主題による変奏曲》が、ラフマニノフの芸術的創造のなかでも独特な位置を占めると気づくのは、興味深いことです。そう、これは、ピアノ曲でありながらオーケストラ作品のように響かせることを試みたピアノ作品、と言えるでしょう。

今回のコンサートで演奏するそのほかの作品は、確かに、師スビャトスラフ・リヒテルへのオマージュといっても差し支えないでしょう。リヒテルによるベートーヴェンのソナタ Op.90の演奏は、心打つ清廉さが忘れがたいだけでなく、心をかき乱すような完全性を備えています。また、プロコフィエフの、カラフルでまるで万華鏡のような《束の間の幻影》の世界を演奏するときは、永遠に、リヒテルの美学の影響を受け続けることでしょう。

アレクサンドル・メルニコフ（ピアノ）
2024年3月13日（水）19：00
ベートーヴェン：ピアノ・ソナタ第27番 ホ短調 Op.90
シューマン：交響的練習曲 Op.13
プロコフィエフ：束の間の幻影 Op.22
ラフマニノフ：ショパンの主題による変奏曲 Op.22
7,000円／U-25 3,500円　全席指定
特別協賛：鹿島建設株式会社

たりもして…結果それができて嬉しい反面、今回も相当難しいものを選んでしまった、と思っています（笑）。

あとは、日本人作曲家を入れたくて、2作品をそれぞれ、前後半の真ん中に配置しました。尾高惇忠《瞑想》は、その名のとおり座禅など仏教的な雰囲気を感じさせ、自分自身と向き合う葛藤のようなものが描かれています。一方で、ドラマティックに展開していく場面もある作品です。細川俊夫の曲は、琵琶や尺八、習字の筆遣いのイメージが盛り込まれていて、同国人として共感しやすい部分が多いと感じます。

ユン・イサン《グリッセ》は、韓国の伝統楽器がモチーフになっています。音の移り変わりに焦点を置いたとても面白い作品で、伝統楽器を表現するという意味では、以前弾いた黛敏郎《BUNRAKU》に共通するところがあります。調べていて知ったのですが、韓国の伝統奏法にはグリッサンドの種類が20種以上あるそうで、そんなに豊富な表現方法があるのかとすごく驚きました。

日本・アジアの伝統的な文化や物が結びついている3曲に対置するかたちで、ペンデレツキとブリテンを――ペンデレツキの無調性から始まって、調性のあるブリテンに向かっていき、また無調性（ペンデレツキ）に戻ってくるという流れも面白いのではないかと思い、この順番にしました。

最後のペンデレツキは、ダークな静けさのなかに強烈な和音が連続していて、緊迫感やおどろおどろしい感じが強く出ている作品。でも一方で、教会の祈りのような静けさもあります。そのコントラストと、とてつもない超絶技巧が聴きどころです。前回の藤倉大《osm》とは異なる超絶技巧がいっぱい出てきて新たな発見が絶えません。最初のカプリッチョは視覚的にも楽しめるので、お客さまはかなり面白いと思います。楽器を叩いたり、駒とアジャスターの間を弾いたり、楽器を壊すのではと心配されるほど、インパクト大です（笑）。

ペンデレツキとブリテンの組曲は、実は今回が初挑戦。ブリテンは、プログラムのなかではもっとも知られた曲であり、調性感の点からも、流れにぐっとコントラストをつけてくれると思います。J.S.バッハを意識しながら、いろいろな要素を大きな流れに繋げていく世界観はブリテン独特のウィットに富んでいてユニークです。そして、冒頭と呼応するかたちで最後に置いた、ペンデレツキの組曲。プログラム全体を締める表現も意識して臨みたいと思います。

＊　＊　＊

トッパンホールの残響は僕にとってとても心地よく、演奏しながら思い描く響きとホールの響きがマッチする瞬間は、いつもたまりません。弱音から爆音まで表現の振れ幅があってもホールが瞬時に反応して高いクオリティーで客席に届けてくれますし、安心して攻めの姿勢で臨むことができます。今回の真新しいプログラムも、本番でどんな風にホールが反応してくれるか、お客さまにどう届くのか、いまからすごく楽しみです。

（2023年11月末／取材・文：トッパンホール）

岡本侑也（チェロ）**―無伴奏 Ⅱ**
2024年3月10日（日）17：00
ペンデレツキ：
　ジークフリート・パルムのためのカプリッチョ
尾高惇忠：独奏チェロのための《瞑想》
ブリテン：無伴奏チェロ組曲第1番 Op.72
ユン・イサン：グリッセ
細川俊夫：小さな歌
ペンデレツキ：チェロのための組曲
5,000円／ U-25 2,500円　全席指定
特別協賛：株式会社 安藤・間

SCHEDULE 2024.1～6 主催公演

トッパンホールチケットセンター (10:00～18:00 土日祝休) 03-5840-2222

日時			公演
1／	14	(日) 15:00	**鈴木優人**(チェンバロ) **J.S.Bachを弾く 3 ―平均律第2巻** 特別協賛：東急建設株式会社
	21	(日) 15:00	**トッパンホール ニューイヤーコンサート 2024** 日下紗矢子(ヴァイオリン)／ペーター・ブルンズ(チェロ)／フローリアン・ウーリヒ(ピアノ) 特別協賛：鹿島建設株式会社
	23	(火) 19:00	**イアン・ボストリッジ**(テノール)、**アレッシオ・アレグリーニ**(ホルン)、**ジュリアス・ドレイク**(ピアノ) 特別協賛：株式会社 安藤・間
2／	13	(火) 19:00	**イリア・グリンゴルツ**(ヴァイオリン) ―**無伴奏** 特別協賛：株式会社 竹中工務店
	16	(金) 19:00	**Trio Rizzle meets イリア・グリンゴルツ**(ヴァイオリン) 特別協賛：株式会社 竹中工務店
3／	10	(日) 17:00	**岡本侑也**(チェロ) ―**無伴奏 Ⅱ** 特別協賛：株式会社 安藤・間
	13	(水) 19:00	**アレクサンドル・メルニコフ**(ピアノ) 特別協賛：鹿島建設株式会社

日時			公演
5／	22	(水) 19:00	〈歌曲の森〉～詩と音楽 Gedichte und Musik～ 第29篇、第30篇 **クリストフ・プレガルディエン**(テノール)**＆ミヒャエル・ゲース**(ピアノ) 特別協賛：株式会社 竹中工務店
	24	(金) 19:00	
	30	(木) 19:00	**クァルテット・インテグラ**
6／	28	(金) 19:00	**ベルチャ・クァルテット**
〈ランチタイムコンサート〉 トッパンホールが選んだ若手ホープによるミニ・コンサート ［全席指定］			
2／	6	(火) 12:15	**Vol.126 中 恵菜**(ヴィオラ) **20世紀のロマンティシズム**

※開場は開演の30分前となります。
※未就学児のご入場はご遠慮ください。なお、全主催公演で託児サービスをご利用いただけます［有料・要予約］。
お申し込み・お問い合わせは(株) マザーズ 0120-788-222まで。

2023年12月中旬現在

最新情報はオフィシャルWEBサイトでご案内しています ※WEBチケットもご利用いただけます www.toppanhall.com

INFORMATION

第15回 TOPPANチャリティーコンサート

様々なアーティストが登場してきたTOPPANチャリティーコンサート。15回目となる今回は、トッパンホールとも縁の深い金子三勇士のピアノ・リサイタルをお届けします。2021年に日本デビュー10周年を迎え、充実した演奏活動はもちろんのこと、アウトリーチ活動、そして司会を務めるラジオ番組での楽しいトークなど、多岐にわたって活躍しています。磨かれ続ける高いテクニックに加え、伝えたい想いをのせて奏でられる音楽は、常に多くの聴衆を魅了し、ピアノと誠実に向き合う姿はデビュー当時から今も変わることがありません。

プログラム前半にはショパンの名曲の数々を、後半にはハンガリーにルーツを持つ彼が敬愛する作曲家リストに、金子自身の編曲によるガーシュウィンの《ラプソディ・イン・ブルー》をトッパンホールオリジナルバージョンでお贈りします。多くの人に愛される珠玉の作品に心を潤し、超絶技巧に息を呑む――ピアノの魅力と音楽の楽しさを全身で感じる特別なひとときになることでしょう。ピアニスト金子三勇士のスケール感と同時に、トッパンホールの稀有な音響特性でこそ聴きとれる繊細な表現や新たな発見にも心を傾けてお楽しみください。

金子三勇士(ピアノ)

2024年2月29日(木) 19:00

ショパン：《12の練習曲》より 第12番 ハ短調 Op.10-12〈革命〉
：夜想曲第20番 嬰ハ短調
：《3つのワルツ》より 第3番 ヘ長調 Op.34-3〈華麗なるワルツ〉
：夜想曲第11番 ト短調 Op.37-1
：ワルツ第6番 変ニ長調 Op.64-1《子犬》
：ピアノ・ソナタ第2番 変ロ短調 Op.35《葬送》
シューマン(リスト編)：献呈
リスト：愛の夢 第3番 変イ長調
リスト：ラ・カンパネラ
(《パガニーニによる超絶技巧練習曲集》より 第3番 嬰ト短調)
ガーシュウィン(金子三勇士編)：ラプソディ・イン・ブルー
(トッパンホールオリジナルバージョン)

全席指定：5,000円 ※印刷博物館入場可(当日のみ)
主催：TOPPANホールディングス株式会社
寄附先：公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター(ACCU)

チケットのお申し込み・お問い合わせ：トッパンホールチケットセンター

～これまでのコンサート～

第1回	前橋汀子(ヴァイオリン)	2008年2月8日
	荘村清志(ギター)	2008年2月9日
第2回	奥村 愛(ヴァイオリン)	2009年3月6日
	舘野 泉(ピアノ)	2009年3月7日
第3回	三浦友理枝(ピアノ)	2010年3月5日
	徳永二男(ヴァイオリン)	2010年3月6日
第4回	松田理奈(ヴァイオリン)	2011年3月10日
第5回	森 麻季(ソプラノ)	2012年3月1日
	The JADE ザ・ジェイド	2012年3月14日
第6回	宮本笑里(ヴァイオリン)	2013年3月6日
	須川展也(サクソフォン)	2013年3月7日
第7回	レ・フレール	2014年3月5日
	山形由美(フルート)	2014年3月7日
第8回	小菅 優(ピアノ)	2015年3月12日
	林 美智子(メゾ・ソプラノ)	2015年3月13日
第9回	仲道郁代(ピアノ)	2016年3月10日
	吉田恭子(ヴァイオリン)	2016年3月12日
第10回	TSUKEMEN ツケメン	2017年3月1日、2日
第11回	カール=ハインツ・シュッツ(フルート)＆サラ・クリスト(ハープ)	2018年6月1日
第12回	大萩康司(ギター)＆三浦一馬(バンドネオン)	2019年5月29日
	森 麻季(ソプラノ)	2019年6月6日
第13回	朗読とクラシック音楽の響宴「ことばのしらべ」	2021年10月31日
第14回	前橋汀子(ヴァイオリン)	2022年11月22日

本公演の収益は、公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター(ACCU)に寄附され、カンボジア女性の識字学習支援事業「SMILE ASIA プロジェクト」の推進に役立てられています。

TOPPANチャリティーコンサート

伸びやかに歌うヴィオラ

お昼のひとときに、瑞々しい若手演奏家による本格的演奏会をお届けしているトッパンホールの〈ランチタイムコンサート〉。2月は少し趣きを変えて、成熟した魅力が漂うステージをお届けします。出演は、新日本フィルの首席奏者としても人気の、ヴィオラの中恵菜。トッパンホールにはカルテット・アマービレのメンバーなどで幾度となく登場、特に2度にわたるヴィトマン《狩》の熱演は大きな話題になりました。今回はカルテットを離れ、自身が主役。プログラムは実に刺激的で、ペンデレツキの無伴奏に、ヴォーン・ウィリアムズ、ブリテンの心揺さぶる作品が組み合わされました。室内楽経験豊富で気心の知れた有吉亮治をピアノに迎え、伸びやかに歌い上げるヴィオラの調べに、どうぞご期待ください。

〈ランチタイムコンサート Vol.126〉
中 恵菜(ヴィオラ) 20世紀のロマンティシズム

2024年2月6日(火) 12:15

有吉亮治(ピアノ)
ペンデレツキ：無伴奏ヴィオラのためのカデンツァ
ヴォーン・ウィリアムズ：ヴィオラとピアノのためのロマンス
ブリテン：ラクリメ―ダウランドの歌曲の投影 Op.48

入場無料(要予約／お一人様2席まで)
受付期間：2023/12/19(火)～2024/1/16(火)
お申し込み方法：ハガキ(抽選制・当選者のみ通知)
〒112-0005 東京都文京区水道1-3-3
トッパンホールチケットセンター「ランチタイムコンサート Vol.126」受付係
(住所、氏名(フリガナ)、電話番号、希望席数を明記ください。)

キラリふじみ・コンサートシリーズ　トッパンホール企画協力公演

ニューイヤーコンサート 2024
異国への憧れ、祖国への愛着…

12月の第1週、富士見市内の小中学校に笹沼樹と兼重稔宏によるブラームスの2番のソナタが響き渡った。音楽室で行われたアウトリーチでは、至近距離で奏でられるチェロの雄渾な演奏に驚き惹きつけられる生徒たちの真剣なまなざしが印象的で、時間は瞬く間に過ぎ、最後は生徒たちの真摯で自由な質問とアーティストの答えがユーモアを含んで交錯した。

12回目を迎える本コンサートには、トッパンホールゆかりのアーティスト、とりわけ俊英たちが、よく知られる名曲で腕を競い、アンサンブルの魅力を奏でる。今回のテーマは、「異国への憧れ、祖国への愛着」。J.S.バッハ、ブラームス、ドヴォルジャークの名作に、小川恭子、大塚百合菜、田原綾子、笹沼樹、兼重稔宏、實川風ら6人が自身の探究と想いを託し、新年を寿ぐ。地元を中心に東京や横浜などからも集うお客さまの質もトッパン同様に極めて高く、弾きごたえたっぷりのシリーズに成長した。まさに「継続は力なり」だ。

アーティストとインティメットな関係を築きたいというキラリの意向を受け、複数回出演を重ねるアーティストも多く、田原と笹沼は5年連続、いまや各地で息の合った絶妙のデュオを奏でる笹沼と兼重のコンビもここで誕生した。初企画となるピアノ連弾は、芸大同期ながら、意外にも初共演の實川風と兼重稔宏によるハンガリー舞曲とスラヴ舞曲。タイプも性格も大きく異なる2人が実に楽しそうに連弾する様を思い浮かべていただきたい。何だか楽しそうでしょう？ 前回初登場で、モラヴィアのヤナーチェクのヴァイオリン・ソナタに初挑戦し、その妖しげな世界を印象的に描いた小川恭子が、今回はボヘミア人ドヴォルジャークのピアノ五重奏曲のリーダーを務める。キラリまで聴きに行ってよかったと言っていただけるよう、各人が胸に熱い思いを抱きながら曲づくりに邁進している本コンサートで、おせち料理のように多彩な作品をたっぷりお楽しみいただきたい。

(西巻正史／プログラミング・ディレクター)

2024年1月28日(日) 15:00

小川恭子、大塚百合菜(ヴァイオリン)／田原綾子(ヴィオラ)
笹沼 樹(チェロ)／兼重稔宏、實川 風(ピアノ)

【實川】
J.S.バッハ：イタリア協奏曲 ヘ長調 BWV971

【笹沼、兼重】
ブラームス：チェロ・ソナタ第2番 ヘ長調 Op.99

【實川、兼重】
ブラームス：ハンガリー舞曲集 WoO1より
第4番 ヘ短調／第5番 嬰ヘ短調／第6番 変ニ長調
第19番 ロ短調／第20番 ホ短調／第21番 ホ短調
ドヴォルジャーク：スラヴ舞曲集より
第1集 第8番 ト短調
第2集 第2番 ホ短調／第8番 変イ長調

【小川、大塚、田原、笹沼、兼重】
ドヴォルジャーク：ピアノ五重奏曲 イ長調 Op.81

全席指定：4,000円／U-25 3,200円／高校生以下500円

プレコンサート 14:15～
荻原緋奈乃(ヴァイオリン)
朴 沙彩(ピアノ)
ベートーヴェン：ヴァイオリン・ソナタ第3番 変ホ長調 Op.12-3

※ニューイヤーコンサート2024公演購入者は、プレコンサートをご鑑賞いただけます。

主催：公益財団法人キラリ財団
会場：富士見市民文化会館キラリ☆ふじみ(東武東上線 鶴瀬駅)

お問い合わせ・ご予約：キラリ☆ふじみ 049-268-7788

表紙：イリア・グリンゴルツ

凄すぎるが故か、その圧倒的な真価がなかなか認知されない異才グリンゴルツ。トッパンホール初登場はいまから20年前。まだあどけなさの残る20代前半の貴重な姿が本紙で蘇りました！ 2月には、驚異の無伴奏とTrio Rizzleとの室内楽で5年ぶりにトッパンに帰ってきます。クールな男の恐るべきヴィルトゥオジティを全身で体感する2日間に、どうぞお立会いください。

編集後記

技術の進歩は目覚ましいもので、印刷技術もまたしかり。今号の表紙はなんと20年前の写真！で、当時の撮影機材は最先端だったものの、表紙にするにはちょっと画像サイズが足りず、かなり拡大率をあげて制作しています。細かなニュアンスが潰れてしまうのではと心配していましたが、なんということでしょう…。穏やかな笑顔、それとは対照的な躍動感ある弓さばきが、きれいな仕上がりで表現されてきました(さすがTOPPAN←自画自賛)。鮮やかに蘇った写真とあわせて、グリンゴルツの凄さがギュッと凝縮された特集記事もお楽しみください。(雪)

発行日：2024年1月1日 発行・編集：株式会社トッパンホール 広報部 〒112-0005 東京都文京区水道1-3-3 (03)5840-2200 https://www.toppanhall.com/ 制作：株式会社トッパングラフィックコミュニケーションズ 印刷：TOPPAN株式会社
©TOPPAN HALL 2024.1 KI
※当紙に掲載している内容について、許可なく複製あるいは転用することを固く禁じます。